

研究テーマ	共働きが子育てにおよぼす効果と課題 —地域に培われた家族形態の背景を通して—
研究期間	平成 22 年度
主たる研究者	【学部・学科】看護福祉学部看護学科 【職・氏名】助教 江口千代

○研究目的

本研究の目的は、福井県の共働きの子育てに焦点をあて、核家族・近隣居住家族・三世同居家族との比較を通して、子育ての実情を把握することにより、その効果と課題を明らかにすることである。

○研究成果

方法

1. **調査対象**：福井県嶺北地方において保育園を利用している共働きの母親を調査対象とした。
2. **調査期間・内容**：平成22年10～11月に、福井県嶺北地方6市の協力を得て39保育園で、調査を行った。調査方法は、質問紙を用いた無記名・自記式回答である。調査内容は、背景として調査の対象者の年齢・子どもの人数・子どもの年齢・福井県での在住期間、また、子育てを左右する直接的要因として、対象者の勤務状況・各休暇の取得状況、子育て支援制度利用状況などを調査した。加えて、祖父母との同居の有無、対象者の夫婦関係、対象者と実・義父母との関係、対象者からみた祖父母・孫関係、そして子育ての満足や不安などである。
3. **分析方法**：統計処理による。

結果

1. **調査票の回答状況**：調査票は、協力の承諾のあった保育園の児童数である約3000部を発送し、園が配布した世帯は、2429部であった。調査表の回収率は、1321部で回収率59.0%であった。そのうちの有効回答数は、1260部であり、有効回答率、95.4%であった。
2. **子育てをしている対象者の背景**：対象者である母親の平均年齢は、 34 ± 4.40 歳(23～49歳)であり、子どもの人数は1～5人、平均人数は、 2.07 ± 0.786 人であった。また、対象者の77.5%が福井県内で出生し、以来福井に居住していた。
 - 1) **対象者の勤務状況**：雇用形態では、常勤が52.0%、非常勤が42.0%、自営業が5.0%であり、1日の勤務時間では、8時間前後勤務する対象者が、69.0%を占めていた。10時間以上勤務する対象者も4.0%見られた。
 - 2) **対象者の家族形態**：対象者が属する家族形態は、核家族11.0%、近隣居住家族41.0%、同居家族48.0%で、同居家族の内訳は、義親同居37.0%、実親同居11.0%であった。また、ここで述べる近隣居住家族とは、両親が、共働きで子育てをしている夫婦の住まいから、30分以内の近隣に居住している核家族とした。また、単に核家族とは、夫婦の両親が遠方に住んでいる家族とした。
3. **子育ての現状**
 - 1) **家族形態と子育ての満足・不安**：家族形態と子育てに対する満足と不安の関係をみるため、満足と不安の得点をそれぞれ高群・中間群・低群に分類した。家族形態と子育ての満足についての比較では、「近隣居住家族」で、満足の高い群（満足している）の割合が27.4%と最も多く、次いで「同居家族」25.3%、「核家族」20.6%であった。逆に「核家族」の子育ての満足の低群（不満を持っている）は、29.8%と最も多く、低群が最も少なかったのは、近隣居住家族であった（図1）。家族形態と子育ての不安についての比較では、「核家族」の不安の高群（不安が多い）の割合が、41.7%と最も多く、「近隣居住家族」や「同居家族」を上回っていた。不安が最も低群（不安が少ない）であった家族形態は、「同居家族」で41.2%であった。
 - 2) **家族形態と勤務状況**：家族形態と雇用形態についてみると、「同居家族」の常勤の割合が59.6%と最も多く、次いで「近隣居住家族」54.7%、「核家族」43.7%であった。それに対して非常勤勤務は、「核家族」57.0%と最も多く、次いで「近隣居住家族」45.3%、「同居家族」40.4%と続いていた（図2・ $p < 0.01$ ）。
家族形態と勤務時間の比較では、どの家族形態も、8時間前後で勤務する母親が6割以上を占めていた。「同居家族」の母親が、長時間の勤務となる10時間以上の割合は、5.7%と数値的には少ないが他の家族形態と比較して同居家族が一番多く、その反対に短時間勤務の5時間未満の割合は、25.0%

と最も少ない割合であった。「同居家族」と比較し、「近隣居住家族」「核家族」と10時間以上勤務する割合が減少するのに対して、「非常勤」の割合は増加していた(図3)。以上から、「同居家族」の常勤割合、ならびに勤務時間は長く、「核家族」では非常勤割合が多く勤務時間も短い傾向にあった。

- 3) **勤務状況と子育ての満足・不安**：雇用形態と子育ての満足の比較では、「常勤」では、子育ての満足の高群が27.2%と最も多く「非常勤」では、満足の高群が23.6%であった。低群についてみると、「常勤」では、23.6%、「非常勤」では、30.4%であった($p<0.05$)。「常勤の母親」は、子育ての満足が高く、「非常勤の母親」で子育ての満足が低かった。

雇用形態と子育ての不安の比較では、「常勤」の不安の高群は33.6%で、「非常勤」では、不安の高群は43.0%と常勤の母親を上回っていた($p<0.01$)。子育て不安をもつ母親は、「常勤」よりも「非常勤」の割合が高い値であった。

次に勤務時間と子育ての満足を見ると、勤務時間が「10時間以上」の母親は、子育て満足の高群が、28.3%、「8時間前後」では、27.2%、「5時間未満」と勤務時間が短くなるにつれて満足している母親の割合が低下していた。逆に、子育ての満足の低群をみると、「5時間未満」の割合が31.3%と最も多く見られた。勤務時間が長い母親ほど、子育ての満足が高く、勤務時間が短いほど満足が低いという結果であった。

勤務時間と子育ての不安の比較では、勤務時間が「5時間未満の母親」で不安の高群の割合が41.0%と多く、「8時間前後」「10時間以上」を上回っていた。

以上の結果から、勤務時間が短い母親ほど、不安が高い傾向にあるといえる。

- 4) **家族形態と家族関係**：子育てを行っている母親が、夫婦・実父母・義父母・祖父母と孫といった家族関係をどのように捉えているかについて検討し、その上で家族形態との関連についてみた。まず、それぞれの家族関係の得点を高群・中間群・低群に分類した(得点が高いほど良い関係を示す)。家族関係に関する結果では、それぞれの家族形態と夫婦関係の満足を比較すると、「近隣居住家族」では、夫婦関係満足の高群(夫婦関係に満足している)の割合が34.4%と最も多く、高群の割合が最も低かったのは、「核家族」の19.3%であった(図4・ $p<0.05$)。それに対して、満足の低群(夫婦関係に満足していない)の割合が最も多かったのは、「核家族」の17.8%であったが、「近隣居住家族」の低群15.0%、と「同居家族」の低群14.9%と大きな変化は認められなかった。

次に家族形態と、母親が祖父母と孫の関係をどのように捉えているかを比較すると、「近隣居住家族」では、34.2%と高群の割合が最も多く、祖父母・孫関係を満足していると捉えていた。「核家族」では、祖父母関係の低群が31.1%と最も多く、次いで「同居家族」、低群の割合が最も低かったのは、「近隣居住家族」であった(図5・ $p<0.01$)。

家族形態と実父母関係、ならびに義父母関係についてみると、家族関係の満足の高群は、実父母関係では、「近隣居住家族」が43.8%、義父母関係では、「同居家族」43.2%であった。これに対して低群が最も多かったのは実父母、義父母関係ともに「核家族」であった。

さらに、「同居家族」を実父母同居と義父母同居に分類し、家族関係について検討した結果、関係の満足の高群の割合が多かったのは、「実父母同居家族」よりも、「義父母同居家族」であった。

以上から、夫婦関係並びに祖父母と孫関係、実・義父母関係ともに「近距離居住家族」が、また同居家族については、実父母同居家族よりも義父母同居家族のほうが高群つまり、関係性の満足度の割合が高いことが明らかになった。

以上のことから、3つの家族形態を背景とした福井県の共働き子育ての現状として以下のことが明らかになった。

1. 近隣居住家族(近隣に夫婦の両親などが居住する核家族)では、家族形態の中で最も子育ての満足が高く、不満が少ない傾向にある。同時に、家族関係の満足度が高い傾向にあった。
2. 三世代同居家族では、常勤が多く、勤務時間が長い傾向にあった。子育てや家族関係に満足も持ち合わせている半面、近隣居住家族に比べて不満は多い傾向にあった。しかし、子育ての不安は最も少ない傾向にあった。
3. 核家族(遠方に夫婦の両親などが居住する)では、非常勤が多く、勤務時間が短い傾向にあった。家族形態の中で、子育てや家族関係について最も不満を持ち、子育ての不安が一番高い傾向にあった。

効果と課題

福井県において共働きで子育てを行っている母親の家族形態の背景には、「三世代同居」があり、本研究においても、共働き家族の48.8%が三世代同居家族であった。しかし、それに匹敵する家族機能を有する「近隣居住家族」(夫婦の両親が近隣に居住している核家族)に着目してみると、その割合は41.0%と「同居家族」に迫る割合である。

この「近隣居住家族」は、3つの家族形態の中で子育ての満足、ならびに家族関係の満足度が最も高い割合を示していた。これは、母親が主体的な子育てを行う一方で、共働きに伴う必要な子育てサポートをいつでも利用できるという環境が準備されていることを意味している。こうした子育て環境が安心かつ適度な距離感となり、家族関係にも良い影響を与えていると考えられる。

また、「同居家族」では、母親の常勤者が多く、勤務時間も長い。しかも、子育てに関しては満足の割合が多く、不安も少ない。このような状況は、同居者である夫婦の両親が、子育てのかなりの部分を代行しているからであると思われる。その結果、主体的な子育てをすることよりも、働き手としての位置づけが

大きい環境ができあがったと推察する。しかし、この結果は母親にとって必ずしも満足しているものではないことが判明した。そこで、三世同居家族では、夫婦のワークライフバランスを見直し、夫婦が主体的に子どもとどう向き合っていくのか、同居者である夫婦の両親が、子育てを代行しやすい環境をどのように育児支援していくのかを見直していく必要がある。

一方で、最も注意を注がなくてはならない家族形態は、年々増加傾向と言われながらも全体の11.0%にしか過ぎない遠方に家族が居住する「核家族」である。核家族では、勤務状況も非常勤が多く、勤務時間も短いという傾向にある。さらに、家族関係が希薄で子育ての不满を持ちやすく、不安も高いという結果であった。このような核家族の現状は、家族が遠方のためサポートを得られにくく、母親の精神的・身体的拘束感を引き起こしやすい環境にあることを示唆していると思われる。したがって、核家族ではこの現状をどう整えていくのか、遠方の家族そして地域・職場が「子育ての支柱」、つまり、支えとして何をすべきか考えながら、現行の行政の支援に加えて「働き方」や「公共の子育て支援サービス」などの活用を積極的に取り入れられるような援助方法、ならびに新たな支援方法を見出すことが課題である。

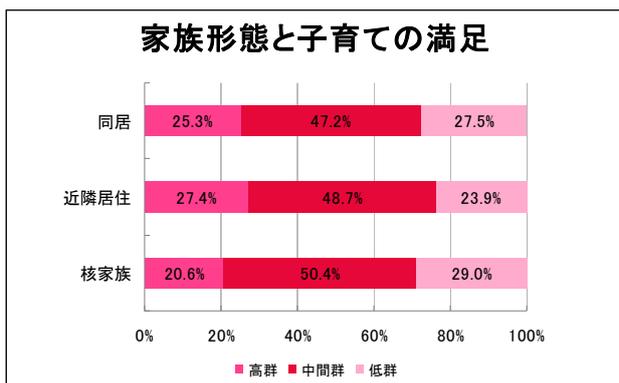


図1

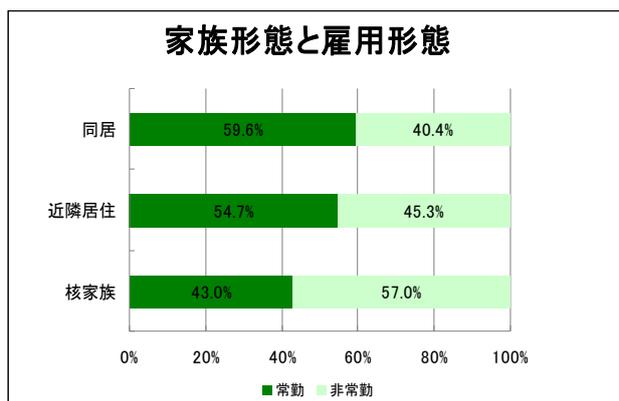


図2

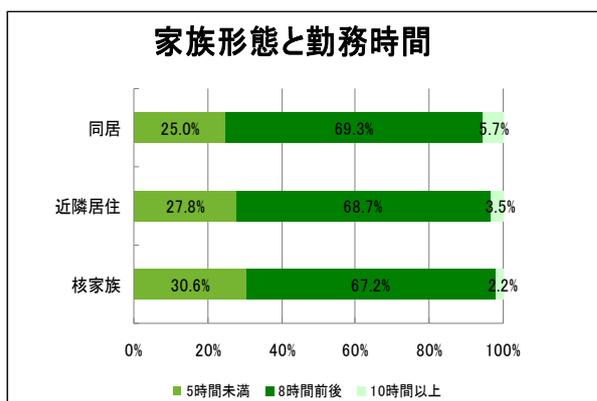


図3

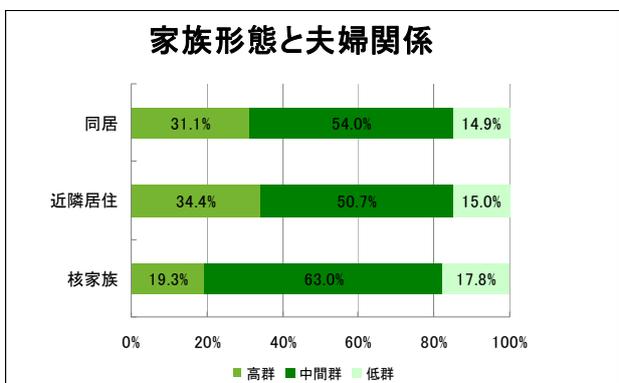


図4

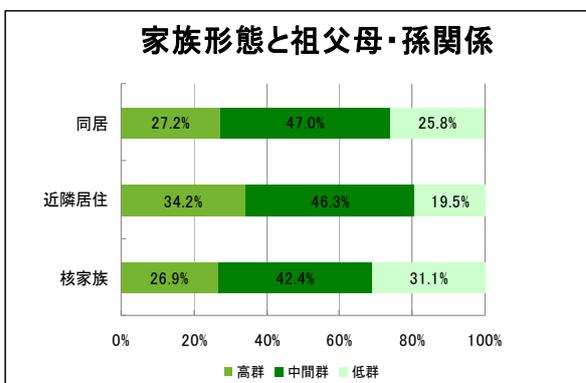


図5